

平成 30 年度 三春校アーカイブ プロジェクト 活動報告書

一般社団法人 ヴォイス・オブ・フクシマ

映像教育
プロジェクト

平成30年度
子どもがふみだすふくしま復興
体験応援事業

ぼくらの三春校
伝えたい歴史
届けたい想い

もくじ

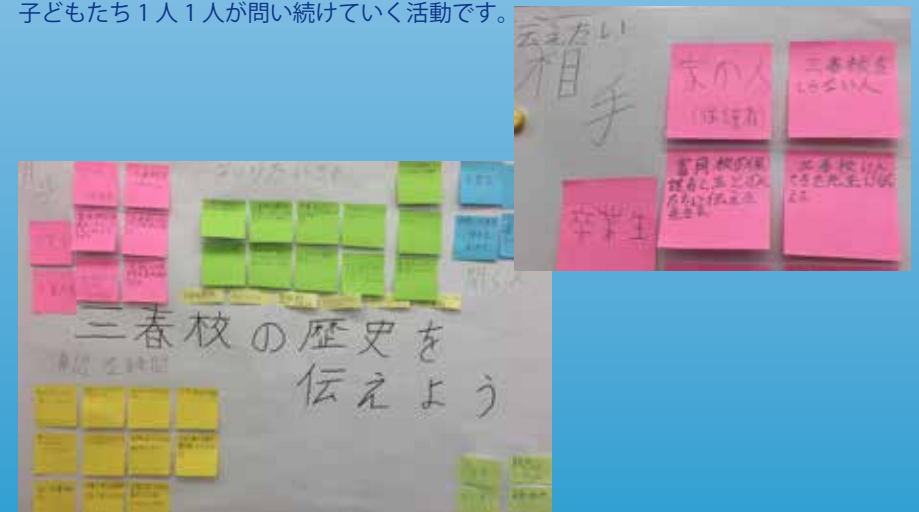
1. はじめに . . . P3
2. 富岡町の学校アーカイブの必要性とその背景 . . . P4
3. プロジェクト概要 . . . P6
4. プロジェクト スケジュール . . . P8
5. 【参考】各地での発表（2018年・2019年） . . . P12
6. 上映会参加者の声 . . . P13
7. 【参考】メディア掲載記事 . . . P15
8. 参加児童感想 . . . P16
9. 実施学校長講評（富岡第二小学校長 渡邊かおり） . . . P17
10. 総括、来年度に向けて . . . P18

はじめに

富岡第一・第二小学校三春校の発信活動は平成 25 年度にスタートし、平成 30 年度現在まで継続している。三春校が発信活動を行うことになったきっかけは、震災後に双葉郡の小中学校で始まった「ふるさと創造学」と、当時放送が行われていた富岡町臨時災害 FM おだがいさま FM の活動協力です。

三春校小学校のふるさと創造学は学習開始時から「生まれ育った富岡町と、現在暮らす三春・郡山市を知る」ことがテーマとして設定されました。そしておだがいさま FM には、「富岡町の“子どもたちの今”を全国の富岡町民に伝えたい」という思いがありました。その両者の思いが合致することで誕生したのが「三春校子どもラジオ放送局プロジェクト」です。仮設小中学校で学ぶ子供たちの様子を全国に避難する富岡町民に伝えることを目的に、三春校小学 5 年生が中心となり、ふるさと創造学の授業時間を活用しラジオ番組を制作、おだがいさま FM で放送をするという活動を、平成 26 年度・27 年度・29 年度に実施してきました。

今年度からスタートしたこのアーカイブプロジェクトは、三春校を母校とし学ぶ子どもたち自身が、言葉やその他さまざまな表現方法を用い、三春校を「発信し、後世まで伝えていく」ことを目的にしています。成長過程の中で思考の変化や言語力・表現力向上などを経て、閉校までの期間で「母校三春校」をどのように残し伝えていくべきか、子どもたち 1 人 1 人が問い続けていく活動です。



富岡町の学校アーカイブの必要性とその背景

震災前、人口約 16,000 人富岡町には 6 つの教育機関が存在していました。いわゆる富岡地区の子どもたちが通った「富岡幼稚園・富岡第一小学校・富岡第一中学校」、そして夜の森地区には「夜の森幼稚園・富岡第二小学校・富岡第二中学校」。各小中学校、多い時には約 500 人ずつの児童生徒が在籍していたということからも、その規模がうかがえます。震災・原発事故により全町避難対象となり、富岡町民は全国各地へ避難を余儀なくされ、その約半年後の 9 月 1 日、福島県三春町にある曙ブレーキ工業株式会社の工場跡地を利用し始まったのが「富岡幼稚園、富岡第一・第二小中学校三春校」です。開校から平成 30 年度現在に至るまで、富岡町からの避難を続ける子どもたちが通っており、富岡町から約 60km 離れた場所で「町の学校の歴史」をつないできました。



そして平成 28 年 4 月、富岡町の一部地域の避難指示が解除となり、平成 29 年度 4 月からは富岡町内で小中学校が再開しました。富岡町は「避難先の仮設校舎<三春校>」と「町内の学校<富岡校>」の 2 つを並走させていく道を選択しました。過去の被災地での学校運営を見ても、このような事例は未だかつてありません。これにより、学校現場は新たな段階へと進み「三春校から富岡校へと歴史をどうつないでいくか」という課題が加わりました。さらに現在、町に帰還した住民が 800 人を超えた富岡町は、三春校と富岡校、そして町民の三者をどのようにつないでいくかの課題にも直面しています。

こうした町や学校の課題を背景にスタートした本事業において、本年度中心となり活動した三春校小学 6 年生 3 名は、幼稚園からこの三春校に通い始め、三春校小学校入学・卒業し、平成 31 年度からは三春校中学校へと進学、三春校が閉校となる平成 33 年度に中学三年生として三春校を卒業する予定です。現小学 6 年生 3 名は、中学卒業年度と閉校年度が同じであることで象徴的な存在となっていますが、彼らだけでなく、これまでこの学校を巣立った児童生徒にとって、避難先の仮設校舎である三春校が母校であることに変わりはありません。また、この三春校開校から運営、支援などに関わってきた多くの教職員・関係者にとっても大切な学校です。何より、開校当初から現在に至るまで「富岡第一・第二小中学校三春校」と名乗っているこの学校は、まぎれもなく、過去の富岡第一・第二小中学校卒業生にとっても「母校の歴史の一部」となり得るものなのです。

三春校アーカイブは、記録する「震災アーカイブ」に留まらず、過去の卒業生の先輩たちから受け継ぎ守ってきた「富岡の学校としての歴史」をこれから富岡町の学校を母校としてゆく後輩たちに向けてつないでゆくための大事な活動であると考えます。

曙ブレーキの三春工場事務棟を利用した三春校校舎



プロジェクト概要

企画統括

久保田 彩乃（一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマ）

制作統括

千葉 偉才也（一般社団法人リテラシー・ラボ）

講師・制作

伊賀 俊 徳

千葉 くらら（一般社団法人コミュニティ・ワークス）

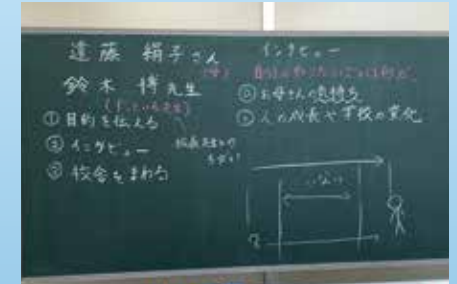
本事業は、三春校を記録に残し後世に伝えるため、在校児童生徒がそのための手段を学び、様々な方法で表現していくことを大きな目的としています。

<この企画のポイント>

- ・在校児童生徒が自分たちの手で後世に残したい「学校の記録物」を制作する
- ・外部のプロ人材を講師として招き、記録制作のための手法・考え方などを学ぶ
- ・その学習過程をメイキング映像として撮影し、子供たちの心身成長過程も記録する



本年度、小学6年生と映像制作をするにあたり、何度も授業で確認したのが「なぜ映像を作るのか」「何のために映像で三春校を記録するのか」という問いです。単なる自己満足ではない、人に伝えるための映像作品にするための探求を続けながら、自分たちが三春校卒業後、大人になってからも見返したくなる作品にするため、「三春校について知っていること、知らないこと」なども徹底的に洗い出し、インタビュー学習に繋がりました。



<本年度学習のポイント>

- ・映像制作に関わる作業に対し、その必要性から学び考え、作品に反映
- ・三春校と他の学校との違いを理解し、自らの想いを作品に反映することを重視
- ・インタビュー学習では、取材対象者の想いを理解し、対話することを重視



未だ学校で使用されている全国からの支援物資

プロジェクトスケジュール

4～6月

- 映像メディアの特長を学ぶ
- 作品テーマ決定
- 取材者選定
- 撮影・インタビュー練習

5年生時にラジオ制作学習を行った彼らとは「映像メディアの持つ特長」や「映像を使って、誰に、何を伝えたいのか」を考えるとところから授業をスタートさせました。ここで彼らが考えた映像作品を作る上でのテーマが「三春校の歴史をたくさんの人に伝える」というものです。

ここからさらに「歴史＝三春校開校までの流れと開校に関わった人の想い」「たくさんの人＝三春校のことを知らない人にも伝わる内容にする」などのように設定テーマの具体化、深堀りをする活動を行い、お話を聞きたい方（インタビュー対象者）を決定させました。

その後、プロの映像ディレクターを講師に招き、カメラでの撮影方法やインタビュー取材の仕方を学習。事前に準備した質問だけでなく、取材相手から返ってきた答えに対し再度その場で反応し、相手の話からまた感じた疑問を聞き返すことなどを学び、実践的なインタビュー練習を行いました。



7～9月

- インタビュー撮影
- 振り返り

7月から三春校開校の歴史を知る関係者の方々へのインタビュー撮影を本格スタートさせました。開校まで奔走した役場・教育委員会関係者、学校関係者、開校当初から子どもを通わせた保護者らに話を聞くことで、自らの通う学校は多くの協力で成り立っていることを知りました。さらに、映像本編には収録されませんでした。自分の家族に震災後からの避難生活の様子や「なぜ三春校に通わせることにしたのか」などのインタビューも行い、記憶の薄い自分の被災体験を理解する機会にもなりました。

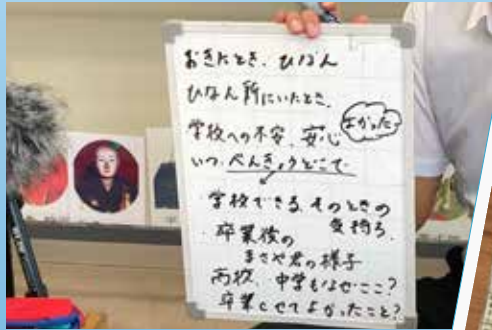


プロジェクトスケジュール

10～11月

- 映像構成
- 編集学習

インタビュー内容を振り返りながら、三春校の歴史を伝えるための「映像構成」を考える授業をおこないました。客観的事実のみを伝えるのではなく、取材相手や自分たちの想いを乗せて伝えることも重視し、映像編集のための考え方を学ぶ授業を行いました。



構成内容を考える授業



12月

- ふるさと創造学サミットにて学習成果の発表

双葉郡の小中学生が一年間かけて学んできた「ふるさと創造学」の取り組みを発表する場で、三春校6年生も映像制作で学んだことなどの成果発表を行いました。



1月～2月

- 映像上映に向けての準備
- DVDパッケージデザイン学習

出来上がった映像を確認しながら、「誰に見せたいか、何を伝えたいか」など改めて確認しました。また、映像制作を行ったことにより自分たちの考えに変化はあったか、どのような思いを持ったかなどを振り返り、三春校への想いを新たに、上映会に向けての準備を進めました。さらに、DVDのパッケージをデザインする授業も行い、デザインで効果的に伝えるための方法や考え方を学習。完成したDVDパッケージにも、彼らの思いがたくさん込められています。



【参考】各地での発表（2018年・2019年）

2018年 学習成果発表

- 10月26日 富岡第一・第二小中学校幼稚園三春校学習発表会
- 12月8日 第5回ふるさと創造学サミット
- 12月18日 学校法人 明星学苑明星小学校交流授業



2019年 上映会

- 3月1日 富岡第一・第二小学校三春校行事「感謝の会」
- 3月6日 富岡町3.11を語る会
- 3月8日 富岡第一・第二小学校富岡校授業
- 3月10日 朝日小学生新聞主催「集まれ！こども編集部上映会」
- 3月26日 ～地域をつなぐ、世代をつなぐ～お茶会 in 富岡※
- 3月30日 ふくしまメディア教育研究会部

※富岡町文化交流センター学びの森内
「富岡町立図書館」に作品DVDを寄贈
致しました



上映会参加者の声

2019年3月1日 三春校内行事「感謝の会」にて



< 富岡町民参加者より >

『映像を見て、改めて富岡・三春校の歩みを知り、作り上げてきたみなさんの思いと子どもたちの成長に感動しました』

『映像すごくよくできていてびっくりしました！
もっとたくさんの人たちに見てもらいたいですね！』

『閉校の話は何っていましたが、DVDで見ると心に響きました。
すてきな母校があって幸せだね。ありがとうございました』

『この三春校ができるまでの歴史がわかりました。富岡町の町長や富岡の先生方の大変な苦勞を知りました。また、子どもを持つ母親、父親の不安な気持ちも自分と重なり、涙が出ました。6年生はとても立派な感想を述べていて、成長を感じました。この上映会に参加してよかったです』



2019年3月10日 朝日小学生新聞主催「集まれ！こども編集部上映会」にて

【参考】メディア掲載記事

2018.12.10 毎日小学生新聞

『三春校の様子を見せてくださり、ありがとうございます。また先生方などのインタビューで思いや気持ちをはっきりと聞けました。ひびかれたとは思わせない笑顔でいられるのがすごかったです』
(神奈川県・小学4年生)

『今回私は、みなさんの映像を見て、1人1人の笑顔が集まって三春校があるんだと感じました』
(福島県・小学5年生)

『自分たちが当たり前だと思っていた日常はたくさんの人々に支えられているということを考えさせられました。この映画を見て、周囲の人たちに三春校のことを伝えていきたいと思いました』
(埼玉県・小学6年生)

『私も同学年ですが、まさか学校のことを映像にまとめて発信しようとは思いませんでした。三春校は3年後にはもうなくなってしまふとのことですが、私も一度三春校に行ってみたいです』
(東京都・小学6年生)



2019.01.29 朝日小学生新聞



広報とみおか 2018年8月号



参加児童感想

たくさんの人たちに、学校の歴史を伝えることができました。見てもらった人たちにたくさんの感想をいただいて、説明したことが伝わったんだなと感じました。まだまだ調べきれいなことがあ
ると思うので、学校の歴史についてこれからも調べていきたいです。

映像作品を作ってこの学校に関わっている方々に見てもらったり説明したりできたので、三春校や富岡町のことを多くの人に伝えられたと思います。

自分たちが調べたことを自分たち以外の人に見てもらえてうれしかった。けれど、しらべることがまだあるからこれからも伝えていきたい。



実施学校長講評

富岡第二小学校長 渡邊かおり

「我が母校の足跡をたどって」

今年度、富岡第一・第二小学校三春校で実施した「三春校アーカイブ映像作品制作」。2021年度で学校閉鎖が決まっている母校の足跡を記録にしたいという6年生3名の願いから、総合的な学習の時間に課題解決学習としてスタートしました。

避難先にできた富岡小学校三春校の最初の入学生として注目を浴び、たくさんのインタビューに答えてきた6年生にとって、映像作成過程でのインタビュー取材は容易なことであろうと思えました。しかし、「えっ、誰に聞けばいいの」「どんなことを聞けば学校の足跡は分かるの」「どう質問したら、知りたいことを聞き出せるの」「分かりやすく伝えるには、どうまとめたらいいんだろう」…児童の学習は難航しました。外部からの専門家に指導を受けたり、他教科で学んだ力を活用したり。この一年間、常に三人で悩み合い、相談し合い、学び合い、喜び合い、一つ一つを解決してきました。そして、6年生の想いが溢れる映像作品「ぼくらの三春校～伝えたい歴史、届けたい想い」は、やっと出来上がりました。

学校の足跡をたどる中、6年生は数多くの事実や人々の想いに出会い、自分たちのすべきことを考えていきました。「富岡町の子どもたちのために学校を作る」と誓った熱い想い、「登校するのを待っていたよ」と様々な支援で語りかける温かい想い。三春校は多くの想いから設立された素敵な学校であることを実感しました。そして、「自分のできることは小さいけれど、支援する側になりたい」「富岡町の応援団として自分のことを考えたい」…6年生は、ふるさと富岡町への抱負を口にするようになりました。

6年生の指導にあたってきた松枝教諭はこう語りました。「今まで当たり前だと思っていたことが、実はとっても大切だったことに児童自らが気付くなど、この三春校アーカイブ映像作品の制作から、6年生の成長が感じられた」と。震災の記憶を風化させたくはないけれど、震災から8年が経ち、震災当時や避難所での記憶を持たない小学生に、震災から学んだことをどのように伝えるか、当たり前と感じる日常生活の素晴らしさにどう気付かせるか、悩む教職員も少なくないはずだ。

三春校アーカイブ映像作品制作という学習を通し、教師が教え込まなくとも「事実を

知り、仲間と共に考え、そして判断する」ことが児童をいかに成長させるかを知りました。6年生は今、「我が母校の足跡を十分には記録しきれていない」と振り返っています。6年生のこの想いは、きっと下級生へと受け継がれていくでしょう。

総括・来年度に向けて

一般社団法人 ヴォイスオブフクシマ 久保田 彩乃

「学校の記録は、町の子どもの成長記録」

子どもたちとの映像制作となった初回の本プロジェクトを主導することは、私にとって初めての試みでした。そのため、学校の先生方や映像制作指導講師その他、周囲の多くの方々へ協力を頂いてのプロジェクトとなりましたが、3人の子どもたちが想像以上に力と個性を発揮してくれ、素晴らしい作品が出来上がり、今はこの作品を1人でも多くの富岡町のみなさん、三春校開校に関わった方々、教職員のみなさん、卒業生、そして三春校をまだ知らない人々にも見てもらいたいという気持ちが溢れています。

振り返ると、今年度のプロジェクト活動の主役となった平成30年度小学6年生の3人とは、彼らが小学2年生だった頃からの関わりです。当時、富岡町の臨時災害FMおだがいさまFMの企画として行っていた三春校でのラジオ番組制作で、平成26年度の小学5年生とその活動を行なっておりました。その時の番組コーナー企画「こどもお悩み相談室」に質問を寄せてくれたのが、小学2年生の横田空くんでした（確か、どうしたらブランコを高くこげるようになるか、というお悩み相談でした）。あどけなさと同時に、当時すでに今につながるユーモアセンスも持ち合わせていたように感じます。その後も折に触れて、おだがいさまFMで彼らにインタビューをする機会を作ってきましたが、3・4年生時には3人全員かなり受け答えがしっかりしていて、特に明るくおしゃべり好きな印象の原田蒼史くんは、インタビューの受け答えがとても上手な印象がありました。しかし彼だけでなく、当時の三春校在校生の多くが取材を受けることに慣れている様子がありました。それが良いことか悪いことかは別として、この現象には私たちメディア側にも責任があります。震災後、多くの報道陣が学校に入り常に取材に晒されてきたことで、大人が求める受け答えを子どもたちは知らず知らずのうちに身につけていたのだと思います。このような状況下で、彼らが小学5年生となった平成29年度、3

人と富岡町にインタビュー取材に行きラジオ番組を制作。番組制作過程ではとにかく「話を聞いて思ったこと、感じたことを率直に言う」ということに注力しました。その中で大きく力を発揮してくれたのが根本大夢くんです。彼はしっかりと自分の頭で考えたことだけをそっと言葉にするタイプで、ラジオ番組内の感想を話す場面でもとつとつと、等身大の言葉で話してくれました。

ラジオ番組制作では「自分の想いを自分の言葉で語る」という課題をクリアした彼らが、いよいよ6年生になり取り組んだのが「映像で自分たちの学校の歴史と関わった人の想いを伝える」という今回のプロジェクトです。学校開校に関わった人や卒業生保護者などそれぞれの人の想いに触れ、それを整理し自分の中に落とし込む。さらにそれをどう切り取り表現すれば多くの人に伝わるかを考え作品を構成するという、映像制作に関わるほぼすべての作業を授業活動で行い、映像制作の過程を体験した中で、3人それぞれに三春校を今までにない視点が生まれ、新たな発見もありました。特に著しい成長を感じたのは、インタビュー撮影を終え、編集構成授業に入った9月後半以降のことです。「自分たちの学校はたくさんの人たちの協力・支援で成り立っている」ということに気づいた後、「富岡町の力になれるよう、自分に何ができるか考えたい」「次の被災地で困っている人がいたら、自分にできることをしたい」などの想いが言葉になって彼らから出てくるようになり、先生方と一緒に、驚きつつも喜びを感じたことを覚えています。

今後は完成した作品を1人でも多くの人に見てもらうための上映会を各地で開催していきたいと考えています。それと同時に、今年度再開した富岡第一・第二小学校<富岡校>の子どもたちにもこの作品を見てもらい、震災・原発事故によって生じた富岡町の学校の混乱から再生への歴史や、それでも町の教育環境を守ろうと奔走した人々の想いを受け継いでもらいたいという思いがあります。外部要員である私が1つの学年を4年に渡って見続けてこられたことへのありがたさと重要性も改めて強く感じ、中学生となる彼らのますますの成長が楽しみでもあります。

来年度以降、閉校年度までこのアーカイブプロジェクトを継続していくにあたり、三春校中学校中田敬介校長とのとある日のお話の中で「彼らの成長過程を映像に収めていくことも1つの学校アーカイブになるのでは」という新たな視点も頂きました。学校の記録とは子どもたちの成長の記録であり、さらにそれは町の教育の記録なのだと思います。次年度はどのような活動ができるのか、今から期待が膨らみます。



平成30年度 三春校アーカイブプロジェクト 活動報告書
発行・編集：一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマ
デザイン：千葉 くらら